

本日の箇所を中心となるのは、13、14節です。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」この言葉が語られたのは、5、6節にあるように、スカルというサマリヤの町の近くの、ヤコブの井戸のところからです。井戸というと私たちは、狭い縦穴が垂直に深く掘られていて、その底に湧いている水をポンプか、昔なら釣瓶を落として縄で引き上げて水を汲む場所を思い浮かべます。しかしこの「井戸」という言葉は14節に「泉」という言葉がありますが同じ言葉です。ですから「ヤコブの井戸」は、町にある井戸ではなくて、町の外にある水のわき出る泉であり、人々は毎日町を出てそこに水を汲みに来たのです。当時の人々は生活のための水はこの泉に汲みに来て、水がめに汲んで家まで持ち帰らなければなりません。このヤコブの泉のほとりで、そこに水を汲みに来た一人の女性と主イエスが出会い、そこで語られたのがこの13、14節のみ言葉でした。

13節で主イエスは、「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。」とおっしゃいました。かなりの時間をかけて、苦勞して泉から汲んで持ち帰った水は、飲む者の渇きを一時癒しますが、しかししばらくすればまた喉は渇きます。しかし人は生きるために水を飲まなければなりません。ただ水はとても重いものですから、一度にそうたくさん汲んで来ることはできません。ですから、何度も泉へ汲みに行かなければならないのです。私たちには想像もできないような苦勞が、昔の人々の生活にはあったのです。そのことを意識しておかないと、14節の主イエスのお言葉の意味を正しく捉えることはできないでしょう。「しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」主イエスが与えて下さる水は、その人の内で泉となるのです。つまり新鮮な水がこんこんと湧き出る泉が自分の内に出来るのです。その水によっていつも新たに潤され、渇きを癒されるのです。主イエスのこのお言葉を聞いてこのサマリヤの女性は「先生。私が渇くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」と願いました。そういう泉が自分の中にあれば、もう遠くの泉へ水を汲みに行く必要がなくなる、と思ったのです。水を汲みに行く必要がなくなるのがどんなに有り難いことであるのか。今の日本では、災害で断水を経験した一部の人にしか分からなくなっています。私も昔の震災の時に水とガスが通るまで3ヶ月ほどかかりましたので給水車が来るのを待ったり、洗濯と風呂は家でできないので隣の尼崎市に出かけたりと、本当に不自由なことだと実感しました。しかも聖書のこの当時は、誰もが日常的に、水の確保の大変さを感じていたのです。

この女性が主イエスにこのように願うに至った、その経緯に注目したいと思います。15節で彼女は主イエスに「わたしに水を飲ませてください」と願ったわけですが、主イエスとこの女性との最初の出会いにおいては、7節に語られているように、主イエスの方が彼女に「水を飲ませてください」と願っておられたのです。その会話の中で、いつのまにか立場が逆転して、彼女が主イエスに、その水をください、と願うようになったのです。ここでいったい何が起こったというのでしょうか。

主イエスはこの時、旅をしておられました。3、4節にそのことが語られています。「主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。しかし、サマリヤを通過して行かなければならなかった。」とあります。ユダヤからガリラヤへ北上していく時に通らなければならないのが、その間にあるサマリヤです。主イエスはユダヤからガリラヤへの旅の丁度半ばにあるスカルというサマリヤの町に来られたのです。5節には、このあたりは「ヤコブがその子ヨセフに与えた地所」だったとあります。その近くに、「ヤコブの井戸」と呼ばれる泉がありました。主イエスは旅に疲れて、その泉のそばに座っておられた、と6節にあり

ます。そこに、サマリヤの女が水を汲みに来ました。旅に疲れ、喉が渴いていた主イエスは彼女に、「水を飲ませてください」と願ったのです。11節には、この女性が「先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。」と言ったとあります。つまりこの泉は自分の手で水をすくって飲むことはできない、汲むものがなければ水は手に入らないのです。主イエスはそれを持っていない。彼女は水を汲みに来たのですから、それを持っています。だから主イエスは彼女に「水を飲ませてください」と頼んだのです。

主イエスがこのように願ったことから、主イエスと彼女との間に会話が始まり、二人の出会いが起りました。それは決して、たまたま偶然に起ったことではありません。この後のところを読んでいけば分かりますが、主イエスは既に彼女のことを知っておられ、彼女を救いへと招くために、主イエスの方から声をかけ、出会って下さったのです。このように主イエスはいろいろな仕方で、いろいろなきっかけを用いて私たちと出会い、招いて下さいます。これを私たちに当てはめるなら、教会から何かを依頼されたことが自分と主イエスの出会いのきっかけだった、というようなことになるでしょう。例えば集会のために部屋を使わせて下さいと依頼されたとか、何らかの仕事を請け負ったとか、あるいは、教会員である家族を通して、自分の専門知識や資格や技術を用いる何かの働きを頼まれて、自分は信仰を持ってはいないけれども、家族が通っている教会のために協力した、というようなことです。教会はそういう時けっこう厚かましく、お金がないので無償で、あるいはほんの僅かなお金でやってくれませんか、などと頼むことがあります。教会がそのような方々によって支えられているというのは有り難いことであり、そしてそれが伝道に繋がっていくことがあるのです。それは実は主イエスが、その何かを用いてその人と出会って下さり、ご自分のもとへと招いて下さったということなのです。このサマリヤの女性も、そのような仕方で主イエスと出会い、招かれたのです。主イエスから水を飲ませてくださいと頼まれたこの女性が、主イエスに水をくださいと求めるようになったのと同じようなことが、私たちにも起り、求めていなかった私たちが主イエスの救いを求めるようになるのです。

この女性が自分から主イエスに水を求めるようになったのは、いくつかの驚きが積み重なったことによってでした。それは実は自然の成り行きで起るのではなくて、主イエスがそのみ業によって作り出しておられるのです。そもそも主イエスの方から「水を飲ませてください」と声をかけられたことは、彼女にとって大きな驚きでした。9節で彼女は、「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」と言っています。彼女はここで二つのことに驚いたのです。一つは、当時、ラビと呼ばれている律法の教師は、公の場で女性に声をかけることはしなかったからです。彼女は、律法の教師が弟子と共に旅をしているのだと思ったのです。そういう律法の教師が、女である自分に親しく声をかけ、水を飲ませてくださいなどと頼むなんて、普通は考えられないことです。

そして第二の、より大きな驚きは、イエスはユダヤ人であり、自分はサマリヤ人だということです。9節の後半に「ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである」とあるように、ユダヤ人とサマリヤ人は当時、お互いに敵意を抱いており、口もきかないような関係でした。そんな関係にある主イエスの方から「水を飲ませてください」と声をかけられたことに彼女はとても驚いたのです。その驚きは彼女の中に主イエスについての一つの思いを芽生えさせたと言えるでしょう。それは、この人は自分が知っている律法の教師たちとは全く違う、という思いです。彼女は、自分の周りに様々な壁、差別があることを感じながら生きていました。彼女は男と女の、またユダヤ人とサマリヤ人の間の隔たり、差別を感じて生きていました。さらに彼女は普通なら水を汲みにくるのは一日の始まり、早朝なのに暑い日中に来ています。それは人目を避けて生きていたということです。恐らく水を汲んだ後もあまり人目につかないようにひっそりと暮らしていたことと思います。そんな生き方は孤独だったでしょう。心の傷を負っていたとも

言えます。ひょっとしたら人にたいし、社会に対し敵意を持っていたかもしれません。しかし今日の前にいるこの人は、そのように人を分け隔てし、差別する思いから全く解放されて、ユダヤ人が、話しかけるのすら汚らわしいと思っているサマリヤ人の、しかも女である自分に、平気で語り掛け、水を飲ませてくださいと頼み事さえしている、その主イエスの姿に彼女は新鮮な驚きを感じたのです。ここが大きな心の分岐点でしょうね。日々、この女性は心によろいを着るようにして自分の弱い部分に触れないようにしたり、もし触れるとしたら攻撃的になって生きてきたと思います。しかし、このお方の前では今まで味わったことのない、安心、安全な気持ちを持ったことと思います。

そして彼女の主イエスに対する驚きは、10節の言葉によってさらに大きくなりました。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」という問いに対して、主イエスはこうおっしゃったのです。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょうか。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょうか。」。彼女には主イエスのこの言葉の意味は恐らくさっぱり分らなかったでしょう。しかし、「水を飲ませてください」と言った「その人」というのは目の前にいるこの人であり、その人が、私はあなたに生きた水を与える、と言っていることだけは分かったのです。そしてこう言ったのです。11、12節です。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです」。彼女は、主イエスが与えると言っておられる「生きた水」を、泉から湧き出る普通の水として捉えています。だから、あなたは汲む物を持っていないのにどうして私に水を与えることなどできるのですか、と言ったのです。しかしここで彼女は、主イエスの言葉に、泉から汲まれた普通の水を与えることとは違う何かを感じ取っています。「あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか」以下の言葉がそれを表しています。ユダヤ人と同じくサマリヤ人にとっても、ヤコブは自分たちの先祖です。そのヤコブが、息子ヨセフを通して、自分たちの先祖であるマナセとエフライムにこの地を与え、ここで生きるようにしてくれたのです。ヤコブがこの井戸を与えてくれたというのは、自分たちが生きていく場としてこの地を与えてくれたことを意味しているのです。そのことを持ち出している彼女の言葉には、あなたも先祖ヤコブと同じように、水を与えるだけでなく、私たちが生きていく場を、言い換えれば私たちに命を与えて下さる方なのですか、という問いが込められています。つまり彼女は、「私がだれであるかをあなたが知っていたなら、あなたの方から私に生きた水を求め、私はそれを与えるだろう」という主イエスの言葉に驚かされつつ、そこに自分たちを本当に生かしてくれる神の力と權威を感じ始めているのです。

主イエスはご自分から彼女に語りかけ、出会っていかれたことによって、主イエスに対する驚きをもたらした、それによって主イエスが与える生きた水を求める思いを少しずつ育てていかれたのです。その上で、あの13、14節のみ言葉をお語りになったのです。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」。それを聞いた彼女は、「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてももいいように、その水をください」と願いました。このようにして、水を飲ませてくださいと主イエスから求められた彼女が、自分から主イエスに水を求める者へと変えられたのです。

彼女が求めているのはなお、泉から汲む普通の水です。けれどもその彼女の心の中には同時に、よく分かっているはずなのに、普通の水を超えた、自分を本当に生かす「生きた水」「永遠のいのちに至る水」を求める思いが芽生えてきていると言えます。「水を飲ませてください」と自分に頼んできたこの方は、

実は私たちを本当に生かす水を与えて下さる方なのかもしれない、と彼女は思い始めているのです。

主イエスは私たちと出会って下さり、語りかけて下さることによって、私たちの中にも、主イエスが与えて下さる生きた水、永遠の命に至る水を求める思いを起し、与えて下さいます。その水は、私たちの渴きを一時癒すだけの、その場しのぎの水ではありません。それは私たちの内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出るような水、つまりむしろ泉と言うべきものです。私たち自身の中をいくら深く掘っても、そのような泉が湧き出ることはありません。この泉は、主イエス・キリストご自身です。主イエス・キリストご自身が私たちの内に来て下さり、宿って下さることによって、泉となって下さるのです。主イエス・キリストと結び合わされることによって、主イエスが私たちの内で泉となり、生きた水によって私たちの渴きを癒し、潤して行って下さるのです。十字架にかかって死んで、復活して下さった主イエスが与えて下さる水ですから、それは「永遠のいのちに至る水」、肉体の死を超えて、私たちを、主イエスの復活と永遠の命にあずからせてくれる水です。「その水を私にください」と求めさえすれば、主イエスという涸れることのない泉が私たちの内に宿って下さり、私たちを決して渴くことのない生きた水によって潤して下さり、流れのほとりに植えられた木のように豊かに実を結ばせて下さるのです。